

Katherine Mansfield の短篇小説 (IV)

—その魅力について—

久 田 竹 一

1922年2月23日に出版された彼女の第三創作集 *The Garden-Party and Other Stories* によってイギリスの文壇に確固たる地位を築いた Katherine Mansfield は、それから1年もたたない1923年1月9日にこの世を去ったが、そのとき彼女は、アメリカの女流作家 Katherine Anne Porter によれば、英米両国の若い作家の間にとうてい信じがたいほどの名声を得ていたという。つまり、彼女は作家的名声が頂点に達したときに死を迎えたのである。そして、1937年（昭和12年）、堀大司はわが国ではじめて刊行された彼女の評伝の中で、次のように書いている。

彼女の名声は、死後14年の今日、ほとんど世界的である。英米はもとより日仏独伊の国々において彼女の作品の紹介、翻訳、批評が行なわれているが、なかんずく日仏においては彼女は最も多数の読者を有する英国近代作家の一人といってもおそらく過言ではあるまい¹⁾。

また、I. A. Gordon は、5年前に出版された Katherine Mansfield についての研究書の *Foreword* の中で次のように書いている。

Katherine Mansfield, it seems to me, still stands. With her there has been no slump, and so no need of a revival, either academic or popular. She continues to be published, to be read, and to be written about.²⁾

このように人気のある彼女の短篇小説の魅力はなんだろうか。これから、この問題をすこし考えてみようと思う。

Nariman Hormasji は, Dickens, Kipling, de Maupassant, O. Henry などが短篇小説の発達に寄与した功績を認めたりえて,

Katherine Mansfield went further than any of them in showing what potential the short story had.³⁾

と述べており, I. A. Gordon は,

She had the same kind of directive influence on the art of the short story as Joyce had on the novel. After Joyce and Katherine Mansfield neither the novel nor the short story can ever be quite the same again. They beat a track to a higher point from which others can scan a wider horizon.⁴⁾

と書いて彼女を賞讃している。

だが、多くの批評家とともにこの両氏も指摘しているように、彼女の作品世界は狭く、登場人物のタイプも限定されている。彼女の作品中では、特異な性格が描かれているわけでもないし、登場人物が異常な状況におちいって手に汗をにぎる冒険をすることもない。また、そこで深遠な思想が説かれているでもない。しばしばその背後に人間の死と老化の問題が提示されているけれども、彼女の作品中でじっさいに起こることといえば、園遊会 (“The Garden-Party”), 舞踏会 (“Her First Ball”), 引越 (“Prelude”) であり、蠅やカナリヤが死ぬこと (“The Fly”, “The Canary”) なのである。彼女の作品世界では、世間知らずの若い女の家庭教師が好色な老人に誘惑されて唇を奪われること (“The Little Governess”) や、このうえなく幸福だと思っていた若い妻が夫に愛人のあるのを知ること (“Bliss”) や、金持ちの若い夫人が町角で飢えた娘を拾って家へ連れ帰ってくる (“A Cup of Tea”) などが大事件なのである。

しかし、Katherine Mansfield の短篇小説の多くは、くりかえし読むことに耐えるすぐれた芸術作品であり、読むたびに新たな発見の喜びを読者に与えてくれるのである。彼女の短篇小説の魅力を一と口でいうならば、平凡事を非

凡に描いて読者に人生の明暗を印象あざやかに認識させる、ということになるうか。

彼女は「おそらく詩でもない、散文でもない、一種の特殊散文」を書こうとしていたのだが、いくつかの作品において、彼女のこの意図はほぼ実現されているといつてよからう。誤解をおそれずにいえば、極度にことばをおしんで暗示的に書かれている彼女の短篇小説を読む喜びは、良質の詩を読む喜びに似ている。含蓄深い語句によって作り出されるイメージに、彼女の本領が最もよく発揮されているように思われる。いくつか例をあげてみよう。

Janey was silent. But her words, so light, so soft, so chill, seemed to hover in the air, to rain into his breast like snow.⁶⁾

Marvin Magalaner も指摘しているように⁶⁾、この作品(“The Stranger”)中の Mr. Hammond と彼の妻 Janey を描くのに ‘hot’ と ‘cold’ のイメージを注意深く対照的に用いている作者は、この個所では「雪」のイメージを効果的に使って、偶然彼女にみとられて死んだ見知らぬ青年のことを話す妻のことばが、彼女が口をつぐんだ後までも夫に微妙に働きかけて、(欲望に燃える)彼の心の中にゆっくりと冷たくしみ通っていく様子を、巧みに書いている。

...he (=the milk boy) made a splash, and an old brown cat without a tail appeared from nowhere, and began greedily and silently drinking up the spill. It gave Miss Moss a queer feeling to watch—a sinking, as you might say.⁷⁾

ここでは、どこからともなくあらわれて、道路にこぼれたミルクをががつと鳴き声も立てずにのみほす尾のない年老いた茶色の猫の無気味なイメージが、落ちぶれて仕事にありつけず、三度の食事にもこと欠く元アルト歌手モス嬢の姿とダブって印象的である。

Monica caught a glimpse of a huge pale sky and a cloud like a torn shirt dragging across before she hid her eyes with her

sleeve.”

「破れたシャツが引きずられていくような雲」というイメージには、33歳の独身女性モニカの神経がささくれ立った不愉快な気持ちが反映されている。Katherine Mansfield の作品には、この例のように、外界の描写に登場人物の感情が反映されて、それぞれの場面にふさわしい雰囲気をつくり出すのに成功している場合が多い。

Taller houses, pink and yellow, glided by, fast asleep behind their green eyelids, and guarded by the poplar trees that quivered in the blue air as if on tiptoe, listening.”

はじめて汽車で外国旅行をする若い女の家庭教師の目から見た早朝の沿線風景。「みどり色のまぶた（ブラインド）のかげでぐっすり眠っている」という表現は新鮮でおもしろく、「まるで爪立ちして、聞き耳を立てているかのようになり、青い大気の中で身をふるわせているポプラの木々」というイメージもさわやかでころよい。

Katherine Mansfield の短篇小説を魅力的にしている要素の一つとして、作中人物の心理を伝達部なしにいきなり地の文の中に混入する「描出話法」（‘Represented Speech’）の巧みな使用も見のがせない。可能なかぎり無駄なことばをはぶこうと苦心していた彼女にとって、描出話法は好みに合っていたのだろう。作者が登場人物の内面にはいりこむ手段として、彼女は円熟期に向うにつれ、いっそうしばしば描出話法を用いるようになっていく。たとえば、初期の作品である“A Birthday”（1911）において主人公 Andreas Binzer の内面がほとんどつねに直接話法で述べられているのに対し、The Little Governess”（1915）あたりから後の、特に *The Garden-Party and Other Stories* に収められている諸作品では、登場人物の心理描写の大部分は描出話法によって生き生きとなされている。例をあげてみよう。

“But, mother, do you really think it’s a good idea?” said Laura.

Again, how curious, she seemed to be different from them all. To take scraps from their party. Would the poor woman really like that?

“Of course! What’s the matter with you today? An hour or two ago you were insisting on us being sympathetic, and now——”¹⁰⁾

“The Garden-Party”の一部である。じっさいに発言された会話の間にはさまれた部分が誰の思考内容か説明されていないけれども、読者にはそれがローラの心理描写であることが容易にわかるであろう。この部分を直接話法や間接話法で書くかわりに、わずらわしい伝達部をはぶいた描出話法を用いて書くことによって、作者は純真なローラの切実な気持ちをいっそう強く読者に感じさせようとしているのである。

また、物語を時間の経過に沿って進めるのではなく、現在から過去、あるいは未来へと、必要に応じて自在に場面を転換させる技法も、彼女の作品の魅力の一つであろう。I. A. Gordon は、その例として、

The week after was one of the busiest weeks of their lives. Even when they went to bed it was only their bodies that lay down and rested; their minds went on, thinking things out, talking things over, wondering, deciding, trying to remember where...¹¹⁾

という書き出しではじまる“The Daughters of the Late Colonel”をあげ、物語の二つのテンス（過去は父親との幸福な生活であり、現在は父親のいないわびしい生活）がこの作品の第一行で暗示されており、物語の残りは第一行に暗示されている意味の拡張であって、場面は現在と過去にわたり、ときおり空虚な未来を示してぞっとさせるといい、この作品中で時間がいかに巧妙に処理されているかを手ぎわよく述べているが¹²⁾、彼女の他の多くの作品でも、現在と過去、ときには未来の場面が交互におかれて、情緒的効果を高めている

のである。

すでに予定の紙数を超過したので詳述するスペースがないけれども、Katherine Mansfield の短篇小説を魅力的にしている要素として、これまでに述べたもののほか、つねに読者の心をとらえて離さない力を持っているすばらしい書き出し (“The Daughters of the Late Colonel” の冒頭はその好例でもある)、きめこまかな (意地の悪い) 観察にもとづく鋭い風刺、大多数の読者にうったえる適度の社会批判などをあげることができよう。そして、さらにひとことつけ加えるならば、彼女の作品にただよっている女らしさも私には魅力の一つである。

[注]

- 1) 堀 大司: *K. Mansfield* (英米文学評伝叢書 No. 82), 東京, 研究社, 1937, p. 270.
- 2) Nariman Hormasji: *Katherine Mansfield, An Appraisal*, London, Collins, 1967, p. 6.
- 3) *ibid.* p. 82.
- 4) I. A. Gordon: *Katherine Mansfield*, London, Longman, Green & Co., 1963, p. 17.
- 5) Katherine Mansfield: *Collected Stories*, London, Constable, 1945, p. 363.
- 6) Marvin Magalaner: *The Fiction of Katherine Mansfield*, Southern Illinois University Press, 1971, p. 105.
- 7) Katherine Mansfield: *Collected Stories*, p. 122.
- 8) *ibid.* p. 191.
- 9) *ibid.* p. 182.
- 10) *ibid.* p. 258.
- 11) *ibid.* p. 262.
- 12) I. A. Gordon: *Katherine Mansfield*, p. 21.